

「第1回 長野県教員研修体系作成会議」議事録

日 時 平成 25 年 6 月 12 日（水）

午前 9 時 30 分～12 時

場 所 県庁 8 階 教育委員会室

1 開 会

2 あいさつ（教育長）

3 自己紹介

4 座長選出

5 経過説明（「教員の資質向上・教育制度あり方検討会議」の提言について）

6 議 事

（1）長野県教育の理念と教員のミッションについて

（2）教員に求められる資質や能力と研修内容について

（3）その他

7 閉 会

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

少々早いですが、皆様おそろいですので始めさせていただこうと思います。私は、本日、進行を行わせていただきます教学指導課高校教育指導係主任指導主事の飯島でございます。よろしくお願いいたします。

では、ただ今より、第1回長野県教員研修体系作成会議を始めさせていただきます。開会に当たりまして、長野県教育長伊藤学司がご挨拶を申し上げます。

(伊藤教育長)

皆様、おはようございます。県教育長の伊藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。委員の皆様には大変ご多忙の中、今回、長野県教員研修体系作成会議の委員のご就任をお願いしましたところ、快く引き受けていただきましたことをまずもって感謝を申し上げます。また、大変ご多用の中、本日の会議にご参加をいただきましたことを重ねて御礼申し上げます。

本会議でございますが、昨年の教員の相次ぐ不祥事によって立ち上げました「教員の資質向上・教育制度あり方検討会議」の提言を受けて設置をさせていただいたものでございます。この提言の中で、長野県の教育の理念と教員のミッションを明確にし、教員に求められる資質や能力の向上を図るための研修のあり方を検討し、より効果的な研修体系を作成するということが求められたところでございます。その具体的な内容について、本会議でご検討いただければと考えてございます。

昨年以來、私ども、学校や教員の信頼回復に全力を挙げて取り組んできたところでございます。しかし、なおもって不祥事が止まらない状況であり、県民の本教育委員会に対する信頼の回復は、まだ、ほど遠い状況でございます。

しかし、「教育は人なり」と言われますように、教育に対する信頼を回復するためには、一人ひとりの先生方がしっかりと子どもたちに力を付け、「この先生に任せれば大丈夫だ」と、県民の信頼を得ていくことが何よりも重要だと考えてございます。様々な教育環境の整備等もございますが、最後は人に帰結する、これが教育だと考えています。

そういった意味で、教員につきましては、養成段階から、採用、その後の研修において、トータルに人材の養成を図っていかなければいけないわけでございます。しかし、ややもすれば、養成段階の問題や採用の問題だけにフォーカスが当たりがちですが、大学を出て、すぐに完成された一人の社会人になるわけではございません。将来を通じて学び続け、成長し続ける教員、この姿なしには教育の信頼回復はいたしません。また、子どもたちも安心して「本県の学校に通ってよかった。長野で教育を受けてよかった」というような気持ちにもなれないわけでございます。

本県においては、従来から教員の研修に力を入れてきたところでございますが、もう一度改めて原点に戻って、本県の教育の理念は何か、目指すべきものは何か、そしてその中で教員はどのような使命を帯び、それを遂行していくのか。そして、その遂行に至る教員に育っていくためには、どのような研修を生涯に渡って受けることが必要なのか。このような根本に立ち返ったところから、改めて委員の皆様にご議論いただき、私ども、それを具体の研修という形に変えていきたいと考えてございます。

「地域に開かれた学校づくり」ということを、私は就任以来、様々な場で申し上げ

てきたところでございます。教員は、教職というプロフェッショナルでございますので、その専門性を高めることは大変重要でございます。また同時に、地域と連携し、地域に開かれた学校において、教員の果たすべき役割が大きく求められているところでございます。是非、今回の教員研修体系作成会議では、そうした観点も加味していただき、周りの様々な人の協力を得、協働しながら子どもたちの教育に当たっていく新しい教員像を実現できるような研修について、ご検討いただければありがたいと思っております。

いずれにせよ、教員も、一人の立派な大人でございます。子どもたちに教育をするのと違って、教員研修とは、最終的にはそれぞれの本人の自覚であり、自分でどう学んで、どうなりたいのか、そして自主的な研修も含めて、日々の研鑽を教員自身がどう積んでいくのかが重要だと考えてございます。このような観点を加味することも必要かと思っております。

恐縮でございますが、非常に重要なものであり、大変盛りだくさんのことをお願いすることになります。教員の養成というものは、一朝一夕に成果が出るものではない、息の長いものでございます。それだけに、早く手を付けなければ、その分、その成果が出るのが遅くなってしまうものでございます。非常に短期間で集中的にご検討いただく形になり、恐縮でございますが、精力的にご検討いただきながら、素晴らしい本県の教員像、そしてそれを目指す教員たち、それをサポートする研修、こういう全体の体系を皆様のお力をお借りしながら作っていきたいと考えてございます。

私ども、行政から見ると、必要な予算は来年度に向けてしっかり確保しなければいけない。そのためには、秋から冬にかけて、一定の方向性が見えてこなければいけないという側面がございます。委員の皆様には大変ご多忙の中、これから数回にわたって、ご検討いただくことになっております。

最後に、皆様のご協力を重ねてお願い申し上げ、私からの冒頭の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

作成会議の委員の委嘱についてご説明申し上げます。

委嘱状を皆様のお手元に配付させていただいております。任期は平成 26 年 3 月 31 日までとなっております。よろしくお願いいたします。

次に、本日が初めての会議でございますので、委員の皆様をご紹介させていただきます。50 音順に皆様のお名前を読み上げますので、恐れ入りますが、ご挨拶をお願いいたします。

(荒井委員)

失礼します。公募委員の信州大学の荒井英治郎です。信州大学の人文学部、理学部、工学部、農学部、繊維学部の 5 学部の教職課程を担当しております。専門は、教育行政学、教育法学、教育経営学として、これまでに新任教育委員研修、初任者研修、10 年経験者研修、危機管理マネジメント研修等、各種研修について担当させていただいた経験がありますので、少しでもお手伝いできればと考えております。よろしくお願いいたします。

(伊藤委員)

伊藤と申します。よろしくお願ひいたします。「教員の資質向上・教育のあり方検討会議」におきまして、「研修専門部会」で部会長を務めさせていただきました。

その中では、長野県の先生方に現場でどのように資質を向上していただくかということについて検討いたしました。しかし、その会議の検討のプロセスだけでは不十分であるということと、それからもう少し基本的なところに立ち返って、たくさんの方のご意見を頂戴しながら、未来に向けての先生方の研修につきましてご検討をいただく必要があるというお話の中で、今回の会議が立ち上がることになったわけでございます。

その間にも幾つかの非違行為について、報道がなされております。とても残念なことだと感じております。しかし、簡単に結論が出るような話ではないと感じております。

一時、長野県は学力低下という問題を抱え、学力向上のために改めて先生方が向かい合ってくださいましたプロセスがあります。子どもたちの学力向上のために、塩尻の教育センターをはじめ、先生方がどのように自分たちの資質向上をさせたかということについて、きちんとした一つの形が出てきたというように記憶しております。

その中では、先生方が技を磨き、それを実践の場で展開していただくことによって、先生方の心や人間力というものも育まれると考えてきたわけでございます。その土台そのものをもう一度改めて見直す必要があるのではないかとということが、一つの結論としても出てきたところでございます。

是非、皆様方のお力により、先生方の学びのため、またはお一人お一人の人生の中で教育と向き合うために、どのような研修を体系として作り上げていくことが必要であるか、積み上げていっていただければと感じております。よろしくお願ひいたします。

(大倉委員)

大倉でございます。よろしくお願ひいたします。

信濃教育会の研究調査部長をしておりますが、信濃教育会は、長野県の子どもの健やかな成長を願って、教職員の職能向上を第一の目的としている組織でございます。このような観点から、この会議で建設的な考えを表せられればよいなと思って努力してまいります。よろしくお願ひいたします。

(北澤委員)

よろしくお願ひします。南佐久郡の小海町にある小海中学校から参りました。教職31年目になります。私自身、長野県の風土の中で育てていただいていると強く思っています。せっかくいただいた機会ですので、この会を通じて、その内実を振り返りながら議論したいと思ひます。よろしくお願ひします。

(櫻井委員)

お世話になります。長野西高校の校長の櫻井と申します。長野西高校はそこに見え

ておりまして、歩いて 15 分か 20 分くらいだと思います。

今回、ご指名をいただきまして、いろいろ考えさせていただきました。自分の教員生活も含めて、いろいろ眺めながら協議したいと思います。それにつけても、非違行為が続くこと、特に被害者が子どもたちであるということに憤りを覚え、感情を抑えられない思い、切ないものがあります。教育委員の皆様、それから地域の皆様、学校を支える皆様の信頼を裏切っているということも確かですし、さらに私ども現場を預かる立場からすると、家族を犠牲にし、自分の時間を犠牲にして一生懸命に職務に励んでいる教職員たちも裏切っているということで、とても切ない思いをしております。

その中で、もう一回立ち返って研修について研究させていただくことは、現場にとってもありがたいことでもあります。現場と委員会をつなぐ役になればよいと思っております。何とぞ忌憚のないご意見をお聞かせいただきながら、私自身も議事に加わらせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(佐藤委員)

上田市から参りました佐藤洋美と申します。3人の子どもをもつ保護者でございます。教育関係には全く素人でございますが、保護者の代表という大げさですが、そういった立場からの発言を是非反映していただければ幸いだと思って、応募させていただきました。よろしくお願いいたします。

(藤澤委員)

長野県経営者協会の藤澤令子と申します。よろしくお願いいたします。

私は経営者協会教育研修部担当をしております。感性とスキル研修というものを14年間会員企業にお伝えしてきたという経過がございます。何らかの形でこの会にも役立ていただき、私自身も勉強しながら、学んでいけたらよいと思って参加させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

(松岡委員)

信州大学教育学部の松岡英子でございます。よろしくお願いいたします。

私は教育学部におりますので、学生を教員として輩出している方でございます。赴任してから30年以上がたつのですが、毎年毎年、いろいろな学生さんがいて、その学生さんをよりよい教師になるように育てておりますが、なかなか行き届かないところもあるかと思います。ただ、私どもは出すだけで終わりではないと、最近強く思っております。出すだけではなくて、出した後も県教育委員会と連携しながら、よりよい教員を育てていくという役割があると思っております。この会議、非常に実りあるものになればよいなと思っております。よろしくお願いいたします。

(米持委員)

おはようございます。長野県松本ろう学校の米持絹子と言います。よろしくお願いいたします。

私も長野県に生まれ育ち、教員生活30数年になりました。長野県教育で育てていただいたことに自信と誇りをもって進んでいけるような子どもさんを育てる先生方と

一緒に歩いていきたいと思って一生懸命やってきました。

今日は、特別支援学校の代表ということで、障害のある子どもさん、それにかかわる先生方、保護者の皆様の言葉を届けられるとよいかないと思って出席させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

ありがとうございました。

本日は、上田市教育委員会教育長の小山壽一様が所用のため、欠席となっておりますが、今後 10 名の委員の皆様でこの会議を行っていただきます。よろしくお願いいたします。

続いて、長野県教育委員会の出席者について自己紹介させていただきます。

(笠原教育次長)

こんにちは。教育次長を本年度、務めさせていただいております笠原千俊です。よろしくお願いいたします。

(武田教学指導課長)

この会議の事務局を担当させていただいております教学指導課の課長の武田と申します。よろしくお願いいたします。

(大日方義務教育指導係長)

義務教育指導係長の大日方貞一と申します。よろしくお願いいたします。

(三浦高校教育指導係長)

高校教育指導係長の三浦章といいます。よろしくお願いいたします。

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

続きまして、資料の確認をさせていただきます。

事前に郵送で本会議の次第をはじめ、設置経緯や任務に関する資料を送らせていただきました。また、ファックスで、本日の議題に関する資料を送らせていただいています。

本日は、机上に次第を表紙にした会議資料と 2 冊の資料、さらに平成 26 年度公立学校教員募集案内・採用選考要項の「未来をひらく」を配付させていただいております。ご確認ください。よろしいでしょうか。

では次に、会議次第の 4 の座長選出についてお諮りをいたします。

会議資料 4 ページ、次第のある冊子でございますが、この会議資料の 4 ページの長野県教員研修体系作成会議設置要綱をご覧ください。

作成会議の座長につきましては、第 6 第 1 項の規定により、委員が互選することとなっております。この取り扱いについてお諮りいたします。いかがいたしましょうか。何かご意見等がございましたら、お出してください。

(北澤委員)

松岡委員が見識をおもちで、この会を取りまとめるには適任かと思います。

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

ただ今、北澤委員から松岡委員を座長にご推薦いただきましたが、いかがでございましょうか。ご賛同いただける方は、拍手をお願いいたします。

(拍手)

ありがとうございます。

では、松岡英子委員に座長をお願いしたいと存じます。よろしくをお願いいたします。

では、松岡委員には、座長席の方にご移動をいただきまして、最初にご挨拶をいただいた後、以降の会議の進行をお願いしたいと存じます。よろしくをお願いいたします。

(松岡座長)

本会議の座長を仰せつかりました信州大学教育学部の松岡と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。

先ほども申し上げましたが、教育学部に赴任しまして 30 年以上、先ほど北澤先生も 30 年とおっしゃったので、私はもっと前から、長いこと教員を育ててまいりました。また、この 3 月末まで、附属松本中学校の校長を 4 年間務めさせていただきました。今まで学生さんをずっと相手にしてきましたが、現場の校長をして、教員にもいろいろな方がいるなということが分かり、教員がどうあればよいのかということについて考えさせられることも多々ございました。

やはり、長野県の発展ということを考えますと、何をおいてもそれは人材だと思えます。幾らものがあっても、それを動かす人がいなければ、よい将来はないということで、教育の果たす役割は極めて大きいということは言うまでもございません。将来を担う子どもたちが、明るく活気にあふれた教育環境の下で、伸び伸びとそれぞれの個性を伸ばしていく。その能力を開花させていく。そのためには、教員の資質能力というものは非常に重要であることは今さら言うまでもないことだと思います。

この会議は、伊藤教育長さんからもお話がございましたように、教員の資質能力を向上させて、教員がいかに情熱と使命を高めるような教員研修ができるのか、効果的なものはどんなものか、さらには具体的にどのような研修をすることが求められるのかということを示すことが任務だと認識しております。

長野県は、かつては教育県と言われました。ただ、今の若い人に聞くと「本当ですか」というような答えが戻って来たりします。私も 30 年ぐらい前にここに赴任したときには、「教育県に行くので、しかも教育学部に行くのだから、頑張らなきゃね」と周りの方から言われました。そのような心構えで来ましたが、今となっては、何か教育県というのもちよっとおこがましいようなところもございます。

昨年、福井大学に用がありまして、いろいろな会議に出たのですが、そのとき、福井大学の先生から「信州教育はすごいですね」と言われました。他の県の方から言われて、私は「えっ」と思いました。福井大学の方から、信州教育の源流である「児童の教育は児童に立ち返って、児童によって児童の内に形成されなければならないので

すよね」と言われて、「そういう言葉があったな」と思わず、はっとしました。ですから、私たちがよい面を忘れていたところを、他県の方に気付かせていただき、さらにまた、そこを勉強していらっしゃるということを知って、原点に立ち返ってみることの大切さを感じました。長野県は、やはり子ども一人ひとりをととても大事にしてきた歴史があり、それを他県の先生方が学んでいるというように思っております。

本会議にお集まりの委員の皆様方は、いずれも各界を代表されて活躍されていらっしゃる方々ですので、様々な観点から、豊富な経験を踏まえた活発な議論を展開していただくことを期待しております。それによりまして、説得力のある優れた提言ができるものと確信しております。

誠心誠意、円滑な議事進行に努めてまいります。そして、実りある成果の取りまとめに努めてまいりますので、是非ともご協力、よろしくお願い申し上げます。

簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。

それでは、会議を始めさせていただきたいと思っております。始めるに当たりまして、座長代理を決めることになっております。

座長代理につきましては、設置要綱の第6第3項の規定がございまして、座長が指名するということになっております。私は「あり方検討委員会」の研修専門部会長でありました伊藤かおる委員にお願いしたいと思っておりますが、皆様いかがでございましょうか。

(拍手)

どうもありがとうございます。

それでは、伊藤委員、こちらの席に移動していただきまして、早速で申し訳ありませんが、一言ご挨拶をお願いいたします。

(伊藤座長代理)

ただ今、ご指名いただきました伊藤でございます。

松岡先生に素晴らしいご挨拶をしていただきまして、私が座長代理でも先生の代わりには到底なれないと思えました。何かありますときには、少しでもお役に立てるようになりたいと思っております。

先ほど若干、経緯はお話させていただきましたし、事務局からも説明がありました。この会議では未来へ向けての長野県教育の議論ができればと思っております。また、広く長野県教育ということになりますと、委員の皆様だけでなく現場の一人お一人の先生方、県民の皆様方の長野県教育への思いというものが、様々におありかと思っております。そのような皆様の思いも反映できるような進め方ができるとよいなと、私は個人的に考えております。先ほどの松岡先生のお話にもありましたように、現場の先生方が改めて「長野県教育とはこういうことかもしれない」とか、「未来へ向けての長野県教育は、このように描いていく必要があるのではないか」と共有できる会議になればよいかと感じております。よろしくお願い申し上げます。

(松岡座長)

どうもありがとうございました。

それでは次に、会議の公開についてお諮りいたします。事務局から説明をお願いいたします。

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

お配りしてございます会議資料5ページの長野県教員研修体系作成会議傍聴要領をご覧ください。

県が実施する審議会につきまして、「審議会等の設置及び運営に関する指針」に基づきまして、原則公開とさせていただいております。公開の方法は、「会議の傍聴及び会議結果の公表により行う」ということにされております。このため、この傍聴要領によりまして会議の傍聴を認めていくということと、会議資料、議事録を県のホームページに掲載してまいります。

このように公表させていただくこととなりますので、ご了承をいただきたいと存じます。また、議事録を作成するために会議の様子を録音させていただきますので、併せてご了承いただきたいと思っております。以上でございます。

(松岡座長)

それでは、ただ今のご説明につきまして、ご質問等がございますか。よろしいでしょうか。

それでは、ご説明いただきましたことをご了解いただいたということでよろしいでしょうか。どうもありがとうございます。

次に、議事に先立ちまして、事務局から本会議の設置等に関して、事前に配付いたしました「教員の資質向上・教育制度あり方検討会議」の提言と、長野県教員研修体系等について、ご説明をお願いいたします。

(武田教学指導課長)

それでは座ったまま説明させていただきます。よろしくをお願いいたします。

この会議の設置に至る経過等につきましては、先ほど教育長及び伊藤座長代理の方からお話があったところでございます。

本日、皆様方のお手元に資料2ということで、「教員の資質向上・教育制度あり方検討会議」の提言の概要をお配りしてございます。提言は多岐にわたるものでありますので、この概要の方で説明をいたしたいと思っております。よろしいでしょうか。

それでは、2ページをお開きください。

この「教員の資質向上・教育制度あり方検討会議」は、四つの部会に分かれておりますが、第1部の「倫理向上専門部会」の1番のところを見ていただきたいと思います。「教員の資質向上について」ということで、「教員のミッションの明確化と教員がしっかり再認識することが必要」と提言していただいております。ここにおいて、ミッションとは、「使命及び任務」と提言の中では定義しているところであります。

それから、「教員の研修のあり方（教員自身のリベラルアーツ教育の再徹底、社会視点で考えることのできる取り組み策の検討など）を見直すこと」と提言をいただいているところでございます。ここで言いますリベラルアーツ教育についてですが、事前にお配りしております「教員の資質向上・教育制度あり方検討会議」の提言本体を

見ていただきたいと思います。13 ページをご覧ください。上から 4 行目でございますが、リベラルアーツ的思考力を言い換えればということで、定義をしているところがあります。「外部の環境変化を鋭敏に感じ取り、自分自身の問題として捉え、それらを自らの行動に反映させていくことのできる思考力を養うことができる」そういう思考力をリベラルアーツ的思考力と提言の中では言っているところです。

こういう教育を再徹底することを提言としていただいたということでございます。

もう一度、概要版の方にお戻りください。

2 ページの 1 の三つ目の「管理職、教務主任等に対するリーダー教育方法の検討と実施」も研修にかかわることでもあります。これについては「研修専門部会」でも具体的な提言をいただいているところでございます。6 ページをご覧くださいと思います。

第 4 部は、「教員の研修に関する提言」でございます。

その 1 番に「長野県教育の理念等を踏まえた教員研修体系の構築」というご提言をいただきまして、「平成 25 年度に「長野県教員研修体系作成会議」を設置」することになっています。これが本会議になるわけですが、「教育の理念と教員のミッション、また、これらを実現するための研修の内容と方法等について検討し、目指す教員像とそれを実現するための研修を構造化した新たな研修体系を作成すること」となっております。

それから 2 の「校外研修の充実」でございますが、「ライフステージに応じた指定研修として、10 年経験者研修の後に、『キャリアアップ研修』を設定することにより、指定研修全体の見直しを行うこと」を、ご提言としていただいているところでございます。

簡単にご説明をいたしますので、先ほどの提言本体の 51 ページをお開きください。この「学び続ける教員を支援する研修イメージ図」は、研修専門部会から提言していただいたものであります。その図の中で、上の方に二重四角で囲ってあります「初任者研修」がございまして、これは教員になった初任者が 3 年間の研修を行います。それから、次の四角にあります「5 年経験者研修」と「10 年経験者研修」。この三つの研修は、法令上、決まっている研修でございます。県教育委員会等が準備をして、全ての教職員が受けるものであります。

検討会議で議論されたのは、この 10 年経験者研修以降においては、全ての教員が受ける研修がないということでございます。ただ、管理職になりますと、管理職研修等は全ての管理職が行うことになっています。そこで、10 年経験者研修以降に、例えば 20 年目とか、年齢 40 歳でとかいうように、指定研修の設定を提言していただいているわけでございます。これを「キャリアアップ研修」として、図の中に位置付けてあります。先ほど北澤委員から、教職 30 年というお話がありましたが、このような研修を含めて、長い教員生活のキャリア全体を通して、どのような研修が必要かということをもう一度見直すべきであると、提言をいただいているところでございます。

概要にもう一度お戻りいただき、6 ページをご覧ください。先ほど申し上げた 2 の「校外研修の充実」については、今申しましたこと、それから、教員が参加しやすい校外研修の実施、大学等との連携、教員研修自体の透明性を高めていくことを提言としていただいております。それらを含めて、「教員研修体系」として、この会議ではま

とめていただきたいということでございます。

それから、本日の次第が表紙になっている冊子の7ページをご覧いただきたいと思っております。本会議は4回を予定しております。冒頭の教育長の話にもありましたように、10月、11月ぐらいのところでおまとめいただくスケジュールで考えているところでございます。

また、座長代理からのお話もございましたが、できるだけ多くの方々の議論を通してまいりたいと思っております。

続いて9ページでございますが、今まで、「長野県の教育の理念」として、いろいろな人から言われたり、あるいは書物に書かれたり、あるいは何らかの場面で議論がされてきたことがございます。子どもを中心に据えた教育、知・徳・体の調和のとれた教育、全人教育、子どもの主体性を重んじた教育、一人ひとりの学びが生きる教育、生活に根ざした教育、開かれた学校づくり、地域と共にある学校、実践を中心とした教育研究、「教育は人なり」を基にした人間力の研鑽、教員のたゆまぬ研鑽等、これから議論される上でご参考にしていただければということで、お示しいたしました。

同様に10ページにつきましては「教員のミッション」ということで、いろいろなところで議論されてきたこと、あるいは国の中教審等で言われていること等を抜き出しています。11ページについても、「教員に求められる資質能力」ということで、案として議論のたたき台として提示しているものでございます。ご参考にしていただければと思います。

説明は以上でございます。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。今のご説明について、まず、ご質問等はございますか。いかがでしょうか。

「あり方検討会議」の「研修専門部会」で、部会長をされていた伊藤委員から、何か補足等がございましたら、お願いできますか。

(伊藤座長代理)

ありがとうございます。

問題の一つ目は、現場の多忙な先生方が、目の前の生徒さんと向かい合いながら、新たに解決していかなければいけない問題について、周りの先生方と支え合って解いていくための仕掛けはどうあればよいかということです。それは、校内研修の充実という形で書かせていただきました。

また、山間部にも学校があり、都市部にも学校があり、大規模校もあり、小さな学校もある長野県で、先生方が異動なさることも一つの資質向上であるということがあげられました。

そして、先ほどもお話がありましたが、22歳で採用された先生は初任研を受け、32歳で10年研をお受けになったら、後は退職なさるまで、研修は全くないという状態にあります。ヒアリングをさせていただいた先生の中にも「ほとんど研修は受けていません」という方もいらっしゃいましたし、お互いにチームとして、先生方が支え合うことにあまり関心をもっていない方もいらっしゃいました。今、現場で生じている

様々な問題に向き合っていくためには、やはり、先生方に問題を共有していただいたり、さらなる問題に気付いていただいたりする研修が必要ではないかと考え、提言させていただいたものがあります。

しかし、新たな研修をどんどん作っていけばよいというように、提言の中で考えていたわけではございません。逆に、既にある素晴らしい長野県内の育みというものについて、改めてその理念や何のために教育というものを行い、そのために先生はどうあるべきなのかを共有する必要があると出されました。哲学とか理念とかいうものを共有するための様々な仕掛けが、知らないうちに小さくなったり、ちょっと変わった形になったりしたことも原因ではないかと、会議の中で出されました。

これまで、このようなお子さんのためにどうするか、地域のためにどういう教育が必要かということは考えてきても、そのために先生方の資質向上はどうするかと、焦点を合わせて考えてきたかと言いますと、あまりなかったかもしれません。

教育基本法に教育の目的は出ておりますが、長野県の教育の目的はどのようなものであり、そのために先生方はどのように人間力を育むのかといったところも、是非議論していただきたいと思っています。そこから糸を引っ張るように、この教育が、このタイミングで、こういう形で教員には必要ではないかと、体系図が仕上がっていくとありがたいと感じております。このようなイメージで提言を作らせていただきました。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。何かご質問はございますか。

(北澤委員)

どのようなタイミングで質問すればよいか分からず、個人的なこだわりで申し訳ないのですが、三点お願いします。

まず一点目は、研修体系というものについて、これまで長野県の職員に対してどのようなものがあったのか。また、他県の教員研修体系で参考にできるものはあるのかということ。

二点目は、今日の資料の9ページを見ると、長野県教育の理念があり、この後、教員のミッション、教員に求められる資質能力となっておりますが、教員のミッションとか資質能力とかには、「長野県」は付かないのかということ。教員のミッションと言っているのは、広くおっしゃっているのか、それともある程度、長野県ということをイメージしているのかが、二つ目の疑問です。

三点目は、この後の議論に入ってしまうかもしれませんが、長野県教育で大事にしてきたことが列挙されています。私も読ませていただいて、そのとおりでと思います。しかし、この会議が設置された経緯というのは、あり方検討会議の提言ですし、そのあり方検討会議は、教員の非違行為から設置されたわけで、これまで大事にしてきたことは意識しないで、原点に戻って考えていけばよいのかなと思うわけです。つまり、これまで大事にしてきたことはそのとおりで思うのですが、それをさらに大事にしていくという確認なのか、それとも大事にされてきたことが大事にされなくなっているという確認なのか、あるいはそれでは不十分だという新たな提案なのか、どの

あたりを狙っていけばよいのかという疑問です。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

それでは、今三点、ご質問がございましたので、事務局からご回答をお願いします。

(武田教学指導課長)

ありがとうございました。

まず一点目の研修体系についてでございますが、他県においても教員研修体系のようなものを作っている県は幾つもございます。そういったものを私どもも手に入れているところでございますが、先ほど、伊藤座長代理がおっしゃったような、こういう理念があって、それを遂行するためにこういう資質能力が必要であって、そのためにはこういう研修が必要なのだという、系統的なもの、それが教員のライフステージ上に、こういう年代にはこういう研修が必要なのだと突っ込んだものについては、まだ目にしていないところであります。ご必要でしたら他県のことを資料としてご提示することはできますので、是非言っていただけたらと思います。

それから、長野県の職員についても同様の研修体系やミッション等を示したものがございまして、これについても必要でしたら言っていただければと思います。

それから、2点目の教員のミッション、教員に求められる資質能力について、「長野県」が付くのかということでございますが、これについては、この会議の中でご議論いただければと思うところでございます。あり方検討会議における研修専門部会の皆様のご意見のニュアンスとしては、教員のミッションや資質能力の前に「長野県」が付くとお考えになってご議論されてきたと認識しているところでございます。

それから、最後の点でございますが、非違行為をなくすための理念とかミッションということなのか、それとも原点に立ち戻って教育そのものなのかということでありました。非違行為から始まった議論でございますが、冒頭で伊藤教育長が話したように、提言の中では、もう一度、教師あるいは教育の原点に立ち戻って、教員としてのミッションを再度自覚することが重要であって、そのことがひいては、非違行為の防止にもつながっていくと認識しているところです。

(松岡座長)

どうもありがとうございました。よろしいでしょうか。他にございますか。

(藤澤委員)

経営者協会の藤澤令子と申します。

一つご質問なのですが、今まで長野県教育というのは、大変歴史が深いものというように私は思って、先生方のお話を伺いました。その中で、教員のミッションだとか、理念というものが、今まで何らかの形で検討されてきたのか、そして今回、新しいものとして、これがミッションですよ、理念ですよとするのかということを確認させていただきたいと思っております。

(武田教学指導課長)

この点につきましては、後ほど大倉先生にご回答していただけたらと思うのですが、長野県の教師それぞれが、理念やミッションというものをおもちであると思っています。そして、こういうものですよと示されなくても、ある程度、共有されてきた部分があると思っていますところでございます。

ただ、そういったものを、例えば長野県教育委員会として、体系的構造的に示すということはしてきておりません。理念については、教育振興計画とかで、ある程度示しているところがございますが、体系的構造的な研修体系を示すという点では、今回が初めてだと思います。

また、それが教師の中で意識されてこなかったかという、決してそうではないと思います。表だって議論されることはなくても、長野県は常に実践を通して研修するというところがございますので、一つ一つの授業、あるいは一人ひとりの子どもの経験や学びというものを通して、理念やミッションを語ってきたと私は思います。大倉先生、いかがですか。

(大倉委員)

私ども、長年教育に携わってきた者として、あるいは信濃教育会員としてかかわってきて、一番根底にある理念というのは「子どもの健やかな成長を願う」この一点だと思います。そのためには、教員の指導力の向上を図るという、職能向上の研修が大事だと考えています。特に今は、保護者をはじめとする家庭の皆様、地域社会との連携がとても大事であると考えています。骨格はこのようなところですので、細かい点は、具体的に即してお話ししたいと思います。以上です。

(松岡座長)

これまで、きちんと理念なりミッションなりは明示していないということですね。先生方、それぞれがもっている。

(武田教学指導課長)

すみません。ちょっと言葉足らずかもしれませんが、それぞれの場面で明示はしていると思います。例えば、教員採用試験では、「求める教員像」ということを出しているし、ある種の研修会での目的とか、ある種の教育研究における理念や目的は出していると思います。しかし、それをトータルしたものとしてはまとめていないのです。

(松岡座長)

今、おっしゃったのは、場所によって違うものではないですね。

(武田教学指導課長)

言葉のニュアンスとしてはそれぞれあると思いますが、根底にあるものは共通していると思っています。

(松岡座長)

分かりやすいフレーズで、いつも同じように、長野県の教育理念はこうですか、ミッションはこうですか、明確には示して来なかったということではいいでしょうか。今回、それをある意味で再確認していく。教員だけではなくて、県民にも分かりやすいような言葉で示されればよいかなと私も思っております。ただ、新たなものをつくるというのはちょっとおかしな話で、今までずっと積み上げてきたわけですから。また、今日の議論の中で具体的にお願いしたいと思います。

他にありますでしょうか。

私から一点質問したいのですが、「教員研修の透明性を高める」という意味が分からないのですが、どういうことですか。この概要の6ページですね。その2の一番下のところですが、教えてください。

(武田教学指導課長)

教員の研修について、一般県民の方はそれをご覧になる機会は余りないと思っています。例えば、総合教育センターで研修している教員について、他の方がそういう様子を見ることは余りない。ですから、教員がどんな研修をしているのかということを知るようにすることが一つです。もう一点は、研修の結果について、この研修をしたらこういう成果が出ましたと、それを例えば保護者の方に示していく努力がもっと必要ではないかということであったと思います。

(松岡座長)

説明責任ということですか。

分かりやすく県民にも、保護者にも、教員がきちんと研修していることを伝えていくということ、透明性と言ったということですね。

それからイメージ図でございますが、ここに大学で行っている免許更新講習を入れ込んだ図になるともっと分かりやすくなると思います。先生方も義務で、更新講習をしなければならないと法律で決まっておりますので、10年研の後、何もやっていないということではないのですよね。その辺も今度つくるときには入れ込んでいただけると、県民にも分かりやすいかなと思います。余り細かく知らない方は、これで終わりになると思ってしまわれると思いますので。

(伊藤座長代理)

専門部会の中でその議論もありました。ただ、文部科学省の免許講習の目的と、長野県の教員研修の目的とを照らして、連携をどうするか、実際に免許更新講習の中に入れ込んでいくか、ということは課題として出ていました。研修体系は、こういった免許講習との関係も考えながら成立させていくべきであろうということも出ていました。それから同時に、大学等との連携についても、長野県では先生方のキャリアアップをきちんと考えているということ、免許講習とリンクさせて、具体的にどうすればよいかという話が出ていました。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。話は出ていたということで、やはり先生方に何度も

研修に出てきていただくのは、とても負担だと思います。それをいかに効率的にやるか、この免許更新講習を長野県の研修とどうすり合わせていけばよいかなど思いましたのでお話ししました。

それでは、本日の議事の方に入らせていただきます。

事務局からご説明がございましたが、本日の会議につきましては、長野県教育の理念と、教員のミッションについて、それから、教員に求められる資質能力と研修内容について話し合うことになっております。

まず、長野県教育の理念について、会議資料の9ページを参考にさせていただきながら、委員の皆様のお考えをお聞きしたいと思っております。事前に資料も配られていて、お目通しいただけたかと思っております。9ページの「長野県の教育の理念として考えられること」と幾つも並んでいるものです。これについて、自由に先生方、思われていることとお話していただければと思っております。

今日は、結論を出すというところまでは参りませんので、たくさん意見を出していただき、次回に向けて整理をしていくということにしたいと思っております。たくさん意見があった方が、材料がいっぱいあった方がまとめやすいし、いろいろな方の意見を取り入れることができますので、是非、積極的なご発言をよろしくお願いいたします。

私も拝見したのですが、ここで教育理念として書いてある中で、下の行はちょっと違うかなと思いました。「実践を中心とした教育研究」とか「人間力の研鑽」とか「たゆまぬ研鑽」、この辺は教師の研修ということで、教育の理念とはちょっと違うかなと思いました。この辺は後ろの方で議論する内容にしていいただければよいと思っております。上の方の「子どもを中心に据えた教育」というのが、長野県の理念として大事なのではないかということを書いてありますし、「知・徳・体の調和のとれた教育」、一般的に言われる全人教育や「子どもの個性を重んじた教育」「一人ひとりの学びが生きる教育」、この辺と、さらにそうではない、これもあるのではないかとかいったようなことで、ご意見を伺えればと思っておりますが、いかがでしょうか。

指名するのは嫌なのですが。

(北澤委員)

私だけがしゃべっているような感じになり、すみません。

理念からきちんと下ろして、資質や能力へもっていきたいという意図はよく分かるのですが、今回の資料はただ羅列してあるので、この理念に対応する資質能力は何なのかということ、これから整合をとっていく必要があると思っております。これがまず一つ目の確認です。

(松岡座長)

そういうことでよろしいと思っております。

(北澤委員)

私の思いで話をしますが、長野県の教育が大事にしてきたことというのは、長野県の中にいたのでは分からないのではないかなというのが素朴な思いでございます。長野

県の外に出たときに、長野県ってこうだよって言われて、先ほど、福井大学のお話もあったのですが、そういう経験を私たち教員はしているのかなと思います。私自身で言えば、20代の終わりに日本人学校へ行かせていただいて、3年間、他県の先生方と一緒に学ぶ中で、長野県の教育はちょっと違うなということを感じました。

それはどういうことかと言うと、東京や大阪、名古屋、北九州など、いろいろな先生と一緒に勤務したのですが、そういった先生方はどこか線を引いているなと思いました。もちろんそれは大事だと思うのですが、その先をもうちょっとやれば、子どもたちのためになるところがあっても、ある線で切るという感じがありました。

(松岡座長)

線を引いているという意味が分かりません。どのようなことですか。

(北澤委員)

すみません。勤務として、そのエリアかどうかという話になってきます。私は、長野県の安曇野で教員生活を始めたときに、「目の前の子どもたちのために、何でもしてあげたい」という思いがありました。他県の先生方からは、そういうことをしたときに、「おまえ、そんなことはするな」と言われました。例えば、学芸会の練習のために、休みの日に子どもを学校へ呼ぼうとすると、「それはだめだ」と。「勤務外だ」「責任の範囲外だ」と言われてしまう。そのような経験をする中で、自分の実践は長野県教育に守られているんだなと思ったのです。アフリカにいたのですが、時々、『信濃教育』が送られてくるんです。その『信濃教育』で紹介されている実践というのが、非常に自分には合うのだけれど、今やっていることは違うなと感じていました。だから、自分の実践を担保しているのは、やはり信州教育というか、長野県教育のもっている器の広さだなと思いました。

その特色の一つは、随分遠いところから研修をスタートしているなという思いです。つまり、明日すぐ使える研修、このファックス1枚とれば、明日の授業に使えるというものではなくて、随分遠いところからインスピレーションとして、私たちに与えてもらってきたと思います。今でもやっている夏季大学はそうだと思うのですが、かつては総合教育センターで哲学の講座もありました。明日の教育にはすぐ役立つかもしれないけれど、遠いところでお互いの理念が共有できるという仕掛けがあって、よかったなと思うわけです。

そして、理念を並べてみれば、このようになるとは思います。長野県の教員の研修というのは、教員の自主性に任されていたなということを感じます。今はそれではだめなのだとはいえ、そうなのですが、やれる人は手弁当でやっていたという気持ちがありますね。

それから、校内での研修がすごく充実していた。先輩との関係の中で、あらゆることを教わってきた。地域の方からも教わってきた。そういうことが、研修が整備される中で、随分矮小化してしまっていて、初任研が始まったから、初任者に対する指導は、指導教員がやればよい。他の教員はちょっと引いてしまうというようなこともあったと思うのですよね。

ちょっと話が広がり過ぎていけないのですが、長野県教育が大事にしてきたことに

については、ここに書いてあるとおりでと思います。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

(大倉委員)

お願いします。

幾つか項目を掲げて書いてくださっているのですが、長野県独自か、それとも長野県を外しても当てはまるものかということを考えると、これらは教育の基本的なところであって、長野県だけはないかと思います。ただ私は、長野県にとって特に大事で独自なものかなというのは、他県との交流や、いろいろな大会に出たときに思うのですが、上から四つ目の「生活に根ざした教育」です。現在、信濃教育会では生活科と理科の教科書を作っていて、そこでは地域素材をふんだんに盛り込んでいます。それを子どもたちが使って勉強してくれている。長野県の自然豊かな環境をフルに生かすというところが一つあるということと、もう一つ「地域と共にある学校」というものも、長野県では大事にしてきていることかなと思います。

「長野県は教育県だ」と今もって全国的な大会などで他県の方から言われるのですが、私が誇りとしてもっているのは、長野県には、かなり努力している先生方が多いということ、それと保護者の方の理解協力というものがあって、行政も重点化してやってきているということが、実際にあるということです。ただ成果として、一つの学力テストとか、そういう一つの方法だけで計っていくと、その順番がどうかというようなことが出てくるわけですが、そういう学力テストも、今から 30 年、40 年ぐらい前にはかなり高かったというようなことを聞いております。そういった面から言うと、今、何を継続して伝統として残していくのか、あるいは何が欠けているのかというようなところを、これから見つめ直してみることが大事だと思います。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。他にどうですか。

(櫻井委員)

長野西高校の櫻井ですが、私、先ほどからの説明の中で、「長野県の」ということにひっかかっていました。また、理念という言葉、理念という意味が何なのかということがありました。

伊藤委員さんのお話から、まず理念があって、それに合わせたミッションがあって、それに必要な資質能力は何で、研修は何だと。こういう筋立てだと思うのですね。そこで理念を考えたときに私が想像するのは、こういう人材を育てたいとか、こういう人材を大事にしたいとか、そういう目標、目的、またはそれに近いものではないかという思いがあるのです。そして、それにはどういう教育が必要だということところが次にあるのではないかと思うのです。

だから、育てたい人材とか長野県人とか、あるいは他にもあるのだけれど、どのような人材を育てていくのか、その基がないと具体的にならないのではないかと思う

のです。高等学校で例えれば、それぞれに学校目標というものがあります。私どもの学校にも学校目標があつて、その次に、中期的な目標があつて、今年目標は何にしましょうとなる。学校目標を読んでいただくと、長期の方で、どんな人材を育てたい、この学校ではこういう人材を育てたいというのが書いてある学校が多いと思います。その共通項がこの理念になるのではないかと思います。大上段に構え過ぎかもしれませんが、そこがちょっと気持ちの中で整理できません。

(松岡座長)

はい、分かりました。

今のご質問に関して、いかがですか。

理念とは何かというときに、長野県で育てたい人材というように置きかえて考えた方が分かりやすい。今、ご説明のように、各学校には学校目標が確かにありますよね。いろいろな目標を掲げていますが、それらを集約すればそれほど違ったことではないだろうということで、長野県の教育の目標、目指すところが、この理念としてよいのではないかというご意見と承りました。

(櫻井委員)

実際に学校目標を決めるときは、そういう議論をしながら決めています。

(松岡座長)

とりあえずコメントがあれば。

(武田教学指導課長)

ご議論いただければと思います。

(松岡座長)

では、その感じが私はよいと思います。やはり理念とは何かと、なかなか難しいので、長野県の教育委員会が何を目指すのかという目標で考えていただいてよいと思います。どうぞ。

(北澤委員)

そうすると、この「第2次教育振興基本計画」で、この中に教育の基本理念もあるし、目指す信州教育の姿もありますよね。

(松岡座長)

ありますね。

(北澤委員)

こういうものと私たちが議論しようとしていることが整合するのか、この辺りの整理も必要だと思います。

(松岡座長)

整合しなければまずいですよね。

(北澤委員)

そうすると、これはもう、ある意味、確定したものがあるといえることですか。

(武田教学指導課長)

その点でございますが、教育振興基本計画等は長期5ヶ年とか、ある程度期限を切っているものであります。今回は20年後の姿というものが一つの目標として示してございますが、今、座長がおっしゃられたように、そのことと、今議論していることが全く違うものになるということは考えられないこととあります。しかし、今回、議論していただくことは、5年後とかではなくて、ある程度、大きな理念とか目標とか、長野県の教員が共有できるような目指すものというイメージで考えていくことを、提言としていただいたと思っております。ですので、教育振興基本計画等で示されていることをある程度意識していただくのは、話が分かりやすいかなと思います。

(伊藤教育長)

確かに、櫻井委員がおっしゃるとおり、目指す人材像というのが当然あって、その人材を育成するために教育はどうあるべきか、学校はどうあるべきか、教員はどうあるべきかとなることは、まさにそのとおりです。こういう人材を育てたいという部分について言えば、今回、県の総合5ヶ年計画等でも書いていますが、例えばグローバルな視野をもちながら地域社会の中で活躍できる、貢献できる人材というような話になりますね。そこが前面に出てくると、「では、それを育成するために英語教育をしましょう」みたいな教育の個別の話になっていってしまうと思うのです。そうではなくて、目指す人材像ってというのは、もちろん不変なところもあればその時々の変遷と流行の中の流行の部分もある。それはその都度、検討をしなければいけないと思います。この人材像、こういう人材をつくりましょうというのはちょっと変な話ですけど、テクニック論というかですね、方法論に走ってしまうと思うのです。

今回この会議の中で是非ご検討いただきたい部分はそちらの方ではなくて、逆に、不変と流行の中でも長野県の教育として目指す部分の変わらない部分と、それを中心として担う教員の有り様、こういう部分をご議論いただきたいという思いがございませぬ。逆に言うと、既にある人材像についてはある程度参考にしていただき、もちろんその時々で変わってくると思いますので、ご意見もいただければありがたいと思っております。そういう様々な人材を育成する上で、長野県の教育が目指すものは何だろう、教師のミッションとは何だろうということを、大変大きな話で恐縮でございますが、ご議論いただければありがたいと思っております。

(櫻井委員)

今のお話、大変よく分かったような気がします。今、不変と流行と言われましたけれども、教育現場で言うと、国自体が大きく教育に対して揺れ動きます。学習指導要領が変わるごとに揺れ動く中で、何を目指したらよいか学校現場でその度に混乱す

ることが事実あると思います。

先ほど言われた、教育の理念、根底に流れている不易なものを見つけましょう、長野県の理念を見つけましょうという方が納得のいく話だと思います。改めてこの会議に大きな期待があることを思いました。

学校現場では、例えばある時期、学力アップ、学力を付けなければいけないというようになりました。またちょっと前は、もう少し幅広い力を、そのまた前は点数を取らないといけないという揺れ動きがあり、何を目指したらよいのか、学校現場は絶えず迷いの中にあります。その中で今、教育長さんが触れた不易のものを見つければ、学校現場では大変勇気付くと思います。難しい課題だけれども、是非、そのようにしたいと思います。

(藤澤委員)

私は、教育研修をしております、産業界の研修の中で感性のスキル研修というものを組み合わせて 10 回ぐらい講座を担当しています。その中で人材開発委員会という委員会がございまして、その中でいろいろ検討してきたことが、教員と共通に考えられると思います。そこでは、ビジネスリーダーが、「地球人」という大きな視点から、どういう人間を育てたいのかというところを研修しています。どういう社会にしたいのかという視点から教育を考え、地球人として、いろいろな生き物だとか物の考え方だとかを先人から学び、それによって自然にも感謝するという研修を行っております。そういう視点を、この長野県の教育にも組み込んでいかれないのかなということを、今のお話を聞いていて思いました。

先ほど大倉委員さんがおっしゃったように、地域とのかかわりも研修の中に入れていまして、管理職の方の育成ということで、林業体験をしたりしています。

あと、グローバルな見地ということに対しては、英語力を付けるというところまではいきませんが、地域だとか国家だとか、そういうことを学んで、その中で自分たちはどういう生き方をするのか、どういう考え方をするのか、意識改革をしたり、スキルを自分の中で磨いたりしていく研修がございまして。こういうところも、教員の資質向上として同様に研修に位置付けられるかなと思いました。

(松岡座長)

研修の目標とか、そういうことではどうですか。

(藤澤委員)

理念ですね。地域社会の一人として自然と共に生きてきた歴史だとか、知恵だとかのノウハウを礎や基本にする言葉だとしたら、「地域と共にある学校」とか「生活に根ざした教育」とかというところにいくと思います。

また、「子どもを中心に据えた教育」というものがありますが、教員自身も生き生きと、先生方も生き生きと夢を実現するという生き方にも気付いていただきたいといます。何かすごく病んでいらっしゃる方とか、何か前に進まない方とか、産業界でもそういうことがあります。自分たちの理念とか目標とか、そういうものをきちんともって生きていくということが大事なかなと思います。

もちろんこれまでの歴史も、これから変革していくという新しいものも、情報としては捉えていかなければいけないし、改革もしていかなければいけないと思いますが、どういうことが大事だったのか、どういうことを変えていったらよいのかということを見極めて、最後のところにもっていければよいと思います。

理念はやはり、生活に根ざしたとか、そういう言葉になっていくのではないのでしょうか。

(松岡座長)

生活とか地域とか環境とか、そういうところがキーワードになるというお話ですね。

(藤澤委員)

はい。そのように思いました。

(松岡座長)

ありがとうございます。

私が校長をしていた松本中学校の学校目標は、「たくましく心豊かな地球市民」というもので、もう 20 年ぐらい前にこの学校目標を立てまして、ずっとそれが引き継いでいます。昔は変な目標だって思われたらしいのですが、今となってはすごく現代的な目標だなと思っております。このようなものもあると、ご紹介しました。

他にご意見はありますか。荒井先生、いかがですか。

(荒井委員)

信州大学の荒井です。具体的な提案ではないのですが、皆様の議論を聞いていますと、目標と目的との関係、目的と手段との関係が混同してしまっている部分があるようです。教育基本法にもあるように、基本的に目標というのは具体的なもので、理念は抽象的なものだと思います。抽象度が高いことを前提としまして、こちらに載っているものについては、皆様の間でも総論的には合意がとれているのだと思います。

あと、もう一点気になったことは、こちらに幾つか挙げられているもののうちの上の四つは、どのような子どもを育てたいのかという、教育の目的としての子ども像に視点が当てられたものになっております。それから、その次の三つは、教育の手段・方法としての具体的な教育の中身となっていて、どういった教育内容を構成するのかという性格になっています。

私も「地域と共にある学校」というスローガンについては共感する部分が多いですが、今後は、「地域と共に歩む学校」等、未来志向的なスローガンがあってもよいのではないかと考えています。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

最後におっしゃっていただいた、「地域と共にある」ではなくて、「歩む」。こういう進行形の表現がよいのではないかというご意見をいただきました。どうぞ。

(米持委員)

松本ろう学校の米持です。

今、荒井委員がおっしゃったように、目的と手段、方法が、何か一緒くたになっている状況があると思って聞かせていただいています。特別支援教育の立場から言いますと、やはり、子どもさん一人ひとりを大切にすることが原点ではないかと思えます。そのために、こういう教育の方法があるのだよと、列挙してくださったのではないかなと私は受け止めています。

一番大切に考えているのは、子どもさん一人ひとりを大切にすることで、そういう教育を展開しているのが長野県教育なのだと思います。以上です。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

子ども一人ひとりを大切に。こちらの基本理念では、「一人ひとりの学びが生きる」という表現になっているので、似たような論かなと思えます。ここに書いてあることについて、下の三つはちょっと置いておいて、上の方は、これは変だというご意見は多分なかろうということでしょうか。ここに、こんな視点もということでお話いただいていると思えますが、どうですか。

(北澤委員)

ここに「長野県の教育で大事にしてきたこと」とあるので、これから大事にしていくという理念よりは、今まで大事にしてきたことがこういうことなのだなと私は思っています。教員がこれまでそれなりに共有してきたものを、言葉にすればこういう形になると思えます。ここでは、大事にしてきたことではなくて、これからの理念として考えられることとしているのか、ちょっと分からないのですが。

(松岡座長)

9 ページのことですね。

(北澤委員)

すみません、ファックスでいただいたやつ。

(武田教学指導課長)

「大事にしてきたこと」ということで事前に資料をお配りしたのですが、北澤委員さんがおっしゃるように、これからという部分を大事に、意図を変えましたので、今日のところでは「理念として考えられること」と表現を変えております。

(松岡座長)

本日の資料からいくと、今後とも長野県の教育で大事にしていきたいことということになりますか。それは大事にしてきたことでもあると。

(武田教学指導課長)

はい。

(松岡座長)

突然、ここで違うことを大事にするわけではないというように思いますが、どうぞ。

(大倉委員)

下の方の三つがちょっと異質なものだど、座長さんがおっしゃったように、私もそう思います。しかし、これがある面では今度の研修体系作成会議の考えていくべきところと関連してくるのかなと思っています。

それで、この教育研究や研鑽等にかかわって、今思っていることなのですが、長野県の先生方の研修は県内である程度盛んに行われてきた経過があって、県外へ出かけていくというような機会がない人も多い状況があります。例えば県外でいろいろな研究会があったときに、参加された長野県の先生方のアンケートを見させていただくと、「非常に刺激を受けた」とか「長野県ではない県外の人たちは、違う視点で頑張っているな」とか「自分は井の中の蛙だった」とかということが書かれてあります。長野県の教育を考えていく上では、県外のいろいろな情報とか、そのよい姿とかを学んでいく必要があるというのが一点です。

もう一点は、この会は県の教育委員会が主催していることではありますが、民間の団体との関連をどう図るかです。

また、特に今、私どもが悩んでいるのは、信濃教育会であるとか、地域にいろいろな研究会、同好会があるのですが、入会者が多くなくなってきた状況です。要するに入会を勧めても入らなくなってきたという事実があるわけです。それはどういうことかと言うと、一昔前のように手弁当で自主的に研修するより、与えられた研修を無難にこなしていくということ。逆に言えば、いろいろ忙しくなってきた、官制の研修だけで手いっぱいだというようなことがある。しかし私は、これはちょっと違うな、本当に自分からお金を払い、自分で自主的に行く研修ってというのは、身に付く部分が違うと思っています。両方のバランスが大事ではないかなと思うのです。

私が昨年度直接かかわってきた民間のものでは、関東ブロックの算数数学教育研究大会が松本市で行われました。このときには、県教委からは指導主事の先生が助言者としてかかわったり、来賓としてお見えになったりしました。

また、日本連合教育会の研究大会が、これは信濃教育会も加盟しているのですが、広島県の呉で行われました。そして、今年の夏は長野県で行われます。このようにときにできるだけ大勢の方に出させていただいて、他県の様子をよく知っていただきたいと思います。今年、特に信濃教育会で計画しているのは、他県の先生とどのように交流するかということです。わざわざ他県へ行っても、仲間とだけ話をして、他県のレポートやお話は公のところでは聞くが、そのまま帰ってくるというのではなくて、小グループに分かれて、そこに長野県の先生と他県の先生も入って、1時間半くらいみっちり議論してもらおう。いろいろ情報交換をしてもらおうというような企画をしています。

そういったことで、長野県の本当の教育を考えていくには、他県の様子というものもかなり吸収していく必要があると考えています。あるいは民間との関連を図っていく必要もあるかなということをやっています。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

研修のあり方のご意見でしたが、長野県内だけというのはおかしいのではないかと、確かにそのとおりだと思います。外側からどのように見られているか、外側から見るとどうなのかということも常に考えていくことが非常に大事なことだということに思います。

あと、民間の他団体、教育団体との関連ということで、何々研究会とか、教科別の研究会とか、全部まとめた信教とかのように、様々なところがあります。そういうところに積極的に出ていらっしゃる先生は、かなり研修も積まれているのではないかと思います。しかし、最近、加入率が少なくなったということもありました。

確かに今、私が伺っていて、上から与えられた研修というのは義務感だけになってしまうのではないかと思います。教師自らこれがやりたいと計画して、それを実現していく余地も残しておくことがよいのではないかと思います。何もかもきっちり決めてしまうというのはよくないかなという感じを、今お聞きしていて強く思いました。

研修とも絡めて、次のページ、その次のページもまぜて結構です。あまり細かく理念、ミッション、求められる資質能力を分けても余り生産的ではない議論になってしまいますので、全てを合わせながら研修と絡めてご意見をいただけるとありがたいと思います。よろしくお願いします。

(櫻井委員)

三点あります。

今までのことも含めてなのですが、先ほど「子ども一人ひとりを大切にする」とありました。これは本当に小、中、高、幼稚園、特別支援学校の全てに共通する大事な事かなと思って、とてもよい言葉だと思いました。

それから、二点目なのですが、ここに合うのかどうか分からないのですが、長野県では最近、キャリア教育の視点というものをすごく大事にしていると思います。キャリア教育の視点というのは、私が先ほど言った不易なもの、学校で目指す不易なもの部類に入ります。私の教員生活の中でも後半の方に出てきた言葉ですが、とても大事にしなければいけない言葉だと思っています。まだ研究途中でうまく実現はできていないのですが、単なる就業体験ではなくて、広いスタンスのキャリア教育というのは不易なものだと感じています。そうすると教育の理念になるのではないかと、私のイメージです。

それから最後になりますが、研修のことについて言わせていただきます。

専門性の高い、例えば弁護士さんとか、お医者さんは先生と呼ばれているわけで、教員も先生と呼ばれていて、専門性が高いとなるわけです。専門性の高さというところは、教科指導という面で一般の市民の方々よりも知識とか指導力とかがあるというように見てよいのだと思うのです。しかし、その他の人間力と言ってよいのか分かりませんが、そこの辺りの領域を指導するというのは、プロではあるけれども、教科指導程のプロではない。そのため、いろいろな方たちの力を借りなければいけない。そこら辺を変えなければいけないし、そこら辺も強めなければいけないと思います。

よく私どもは先輩方から「一人一研究」と言われました。教科の指導の研修については積極的に参加する人も多いと思うのですが、その周囲の領域の研修となると、ちょっと引いてしまう。ちょっとこれは難しいという形になってしまうので、そこら辺を先ほど言った自主的な研究、一人一テーマで決めて、ある程度長いスタンスで研修をするようにすれば専門的な指導力も、もう少しアップできるのではないかと、そんなイメージをもっています。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。その他、どうぞ。

(米持委員)

松本ろう学校の米持でございます。

ここでも謳っていただいているように、人間力の復活というものを是非提案していきたいなと思っています。もともと人間力がなかったわけではないと思っています。アナログの時代からデジタルの時代に移ってきていますが、アナログというのは不易な部分であると思います。私たちは忘れがちなのですが、人としての土壌がここにあるように思います。ただデジタル化に至った現在、流行の部分での大きな変化への対応ということで、一目散に研修をしなければ、私たちは子どもさんに追いついていけない状況が生まれているというのも事実かなと思っています。

去年の7月に、非違行為防止の研修をこれでもかというぐらいにやりました。それは先生方との面接の中で出てきた不安等の解消のためにやったことなのですが、やはり先生方の意識とすれば、多忙感であるとか、やらせられ感というものが残った研修でもありました。

そこで、ちょっと発想を転換しまして、8月の夏休みに承認研修を一人一日だけ差し上げました。「自分探しの日」と称しまして、自分を取り戻す、それから主体的な研修ということで、自ら企画して運営して実践をして評価をしてください、という一日の研修をしていただきました。

そうしましたら、ここにその一覧があるのですが、先生方は不思議なことに、教師としての原点に戻っているのですね。この一日をどう使ったかと言いますと、新卒の地を訪ねて、その土地を感じたとか、その学校を訪れたとか、それから教員になろうとした大学へ戻って見たとか、こういう先生方がいらっしゃいました。また、人としての生き方ということで、お寺へ行って住職に話を聞き、先祖のお墓参りをしてきたとか、自分の心と向き合いたいということで写経をしたり、滝に打たれたりとか、長野県の自然の中で生かされている自分を感じてきたとか、本当によい経験をされてられました。

これはやらされている研修ではない、自ら企画してやりたい研修であった。だからこんな成果が生まれたのかなということを思っています。また、こういう研修にもやはり限界があるのだろうなと思っています。

先ほどの藤澤委員さんが言われましたように、研修ではなかなか獲得できないもの、個人の自己理解とか感性とか、こういったものを普段の校内研修で行っていかなければ

ばいけないのかもしれませんが。今後の研修体系の中でこういう部分、いわゆる不易な部分、忘れがちであった人としての土壌、こういったものをどこかでやっていかなければいけないと思います。これが人間力の復活につながっていくのではないかと思います。以上です。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。自主的に計画した研修の実績があるようです。

(伊藤座長代理)

ちょっとご紹介だけなのですが、『信濃教育』の中で「信州教育の原点」という記事の連載があって、その中で、理想主義とか人格主義というお話が出ていました。東大の西田幾多郎さんの「自覚の哲学」という自らのあり方を徹底的に掘り下げていくという考え方があって、大正9年に岩波さんが西田さんを講演で呼びになって、それをもとに「信濃哲学会」という会が先生方を中心に設立されて、西田氏に師事しながら哲学を継続的に学ぶことが、ご逝去される昭和20年まで継続したとあります。その中で上伊那の教育会、上小の教育会、南安曇や諏訪や佐久や木曾という教育会で、教育者の視点と立場から哲学的なものを読み解いていきます。その中で、自らのあり方を掘り下げていく「純粹経験」という西田幾多郎の哲学の中で言われた言葉から、草取りや雑巾がけも純粹経験だと、教育の実践の中で深めていく経過が載っていました。また、その中では充実した記録によって常に新しい自己を変革し、ことの意欲を魂の中に目覚めさせて培っていくという、人としてのあり方を、先ほどの一人ひとりを大切にすること、何を深めていくためにお一人お一人を大事にしていくのか、何のために人を大事にしていくのかということにベースのひとつをおきながら、長野県の教育に当たっていたということを紹介します。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。他にはいかがですか。どうぞ。

(藤澤委員)

教師自らの研修という言葉があったり、先ほど課長から、提言の概要の中で、教員研修の透明性を高めるための研究をするということがあったりしていますが、研修をしてすぐに使えるものというのは、私どもとしてはマネジメントスキル研修ではないかなと思います。もし人間力だとか、そういう感性の部分を高めて、すぐ持ち帰って目に見えるものにするというのは、なかなか周りの人が気付かないことがあります。またご自身も、どこのポイントで気付くかということが大変重要で、それを現実社会とどう向き合わせていくかということも大事だと思っています。

私どものやっている感性の部分の研修では、100年スパンで山を育成している林業家の方に出会わせていただく「林業体験」という研修がございます。15名の管理者研修をするのですが、まず「こんな無駄な時間、会社にいた方がもっと自分の仕事ができるよ」ということをおっしゃった方がいました。そこからいろいろ気付いていかれるのですが、「やはり参加してよかった」とか「大地の力強さを感じた」とかという

言葉は、最後のピックアップで出てくるものではないかと思うのです。

先ほど大倉先生がおっしゃったように、バランスもやはり必要であって、キャリア教育にしても10年研修でも、実質的に使えるすぐ持ち帰れるものと、ご自身の中に残ったり、脈々と何かあって、こんなことだったのだねと後で気付いたりする研修の両方が、こういう教員研修の中に必要なのかなということを思います。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

研修と言っても、即効性がある目に見えるものと、やったのだけれど他の人からはなかなか見えにくい、でも本人には変化があったという種類の研修とがありますね。それをどうやって組み合わせていくのかということも課題になると思いました。

その他、いかがですか。

(佐藤委員)

具体的にどうということではないのですが、私は保護者側で、現場の先生の日々の多忙さというものを目の当たりにしています。是非、先生が自らテーマをもって、そのとき必要であるテーマに基づいて受けられるような研修の助けになる方策が一つあってほしいなと思います。後、割と分かりやすく持ち帰れる部分として、どうしたらこの多忙さを効率よく乗り越えていかれるかという研修みたいなものもあって、どちらの方の研修もバランスよくお受けいただけるような方策というものを提言の中に盛り込んでいくとよいのではないかというふうに感じました。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

一般的に研修というと、どこか学校の外に行って何かをするというイメージが強いかと思いますが、先ほど何人かの委員がおっしゃっていたように、日々研修なのですよ。先生というのは子どもに対応し、いつも子どもと接して、その中でどうやって自分が信頼されるか、どうやって教えるかということを考えているので、わざわざ外に出ていなくても学校内で自分の能力を伸ばしていけるような仕掛けが一番大事なかなと思うのですよね。

この忙しいときに何度も外に出て、しかもお金がかかるとなれば、免許更新なんて本当に大変だなと思っております。今までは結構、校内研修が活発に行われていたということもお聞きしますが、今それが停滞してしまったのはどういうところに理由があるのでしょうか。

同じ子どもを見ても、私が見た子どもと、違う先生が見た子どもでは違いますよね。絶対。学校の中でこそ、子どもを理解していく力というものを高めていくとか、そういうことがとても大事だと思います。この会議では、毎日先生方が勤めている場所で、いかに研修的な機能を発揮できるようにするかという辺りも検討できればすごくよいなと思っています。この辺り、長くお勤めの先生いかがですか。

(大倉委員)

一番身近な校内研修がどのようになっているかということは日常的な問題ですよ。私は数年前に現場を離れてしまったのですが、そこでやってきたのは一人一公開ということで、全員が一年に一回は授業を公開する。そして自分の授業を空けないでも、導入のところをしっかりと勉強させてもらおうとか、まとめのところを見ようとかという目的をもって研究に参加するという形で行っていました。

私の若いころは全教科で研究授業もあったし研究会もあったけれど、日常的に隣のクラスや他の見たい先生の学級の授業を見るということはそれ程はなかった。そういうことを、私がいた五、六年前にはやっていたので、今も実際になされているのではないかと思うのです。ですから、今、身近な研修が弱くなったかどうかは、実態をよく現場の先生にお聞きしたいところです。

そして今、かなり高校が授業を開いてきています。昔と違って近隣のいろいろなところに授業公開の通知を出して、かなり開いてきています。お互いに自分の殻に閉じこもらないで授業を公開し合って研修していこうということが、現実にはあるのではないかと思います。

ただ一つ言えるのは、先生方ご自身がいろいろな対応が多くなってきていて、ちょっと心に余裕がなく、多忙感が先に出ているようなところはどうしても否めないと、そんなふうに思います。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

確かにそうですね。私も箱清水に住んでおりますが、西高の通知がよく回ってきます。回覧で。かつて高校はなかなか授業を見せないし、校内の研究授業も余りやらなかったですよ。

(櫻井委員)

研究授業という言葉はあまり使いません。大倉委員におっしゃっていただいたように、私どもの学校で言えば、春と秋に公開授業の週間があります。また、外部の方たちにも積極的に呼びかけて来ていただく日もあります。それから、理念という言葉を使うものもあれば、いつでも公開しますのでどうぞという姿勢で公開するものもあります。

ただ、そのことと教員の授業力や指導力がアップするような研修のところまできちんと積み上げられているか、形ばかりではいけないと思っているところでもあります。例えば授業公開した後に批判し合うとか、批評し合うとか、そこら辺の弱さがあります。それは公開授業だけではなくて、授業の指導力、全体的にも先輩から後輩によきものを伝えるとか、そこら辺が以前に比べて弱くなっていると思います。

公開授業ではいろいろなよい事例があって、そういうものを積極的に、先ほど一人一公開ということがありましたが、実践している。私どもはそれをやっています。先生たちには、授業を公開していく姿勢があって、授業は大事にしたい、授業力を高めたいという気持ちが、大いにあると思っています。

(松岡座長)

その他、どうですか。

(北澤委員)

校内の研修は私も大事だと思っています。

個人的には、授業をきちんとできる先生は、学年、学校のマネジメントもできると考えています。

それで今、授業がかなり少人数化してきていて、子ども一人と教員みたいな関係が非常に多くて、授業をコーディネートできなくなってきたのかなと思うところもあります。子ども同士の会話をきちんと結び付けて、一つの合意形成にもっていくような力が教員自身に弱くなってきているのではないかと思います。そのような中でも、授業をきちんと1時間仕組めるという力は、いろいろなその後のライフコースの中で力を付けていく原点かなと思います。そういうことはやはり学校の中でやっていきたいと思っています。

ただ、授業づくりにどっぷり時間をかけられる余裕が、今なくなっていますし、振り返ってみると、土曜日が休みになってから、かなりそういう傾向があるかなと思います。かつて土曜の午後は、地域の同好会の研修に出かけたり教科会をゆっくりやったりと、そういう時間として確保できていたのですが、今はもう金曜日までの中で、ぎりぎりのところでみんな生活しているので、集まって研修をするということも難しいと思います。ただ、うちの学校も、一人ひとりがテーマをもってやっています。

私はこの日々の研修もそうですが、教員にとって異動そのものが研修ですので、この学校へ来たからにはこのことを自分の役割として、テーマとして研修していこうと意識できないと、何となく動いただけになるのかなと思います。

地域の校長会の10年研の担当を私はしていますが、去年、10年経験者を集めて、今まで異動してきた学校についてラベルを貼ってまとめてもらいました。この学校では私はこうだった。そういう中で自分のライフコースを意識して、確かにスキルアップしている部分もあるし、あの頃はこうだったなということになる。管理職としては、その先生の役割というものを明確にしないと、研修がスタートできないのではないかなと思っています。以上です。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

やはり、土曜日が休みになったというのは大きく違うことなのでしょうか。

(北澤委員)

個人的にはそう思っています。

(松岡座長)

そうですか。

では、その他こんな研修もとか、このミッションもとかと、絡めていただいても、よいのですが、いかがでしょうか。教員に求められること、子どもの命や安全を守ること等、ずっと書かれてございます。10ページでは、子どもを対象としたことでずっ

と下の方までいきまして、最後の四つはちょっと違って、保護者、地域があって、チームでということ、同僚性ということが最近よく言われますね。やはり教員同士がチームを組めないといけないし、コミュニケーションもとれないといけないということ。その下の二つは、教育への情熱と、学び続けるということですが、教員本人に求められることで、ちょっと対象が違ってはいますが、教員に求められることです。

次、三番目が「教員に求められる資質能力」ということで、倫理観とか、新しいものをいつも求めるとか、柔軟な発想等が書かれていますので、この辺についてもご意見を頂戴できればありがたいと思います。いかがでしょうか。大倉委員。

(大倉委員)

よろしいでしょうか。ミッションの最初に書いてある「子どもの命や安全を守ること」と右側の「高い倫理観」というものがあるのですが、私はこの提言を読ませていただいて、この現場の先生の中に体罰だとかわいせつ行為だとか、そういったことで、子どもの命や安全をおびやかしているという事例が幾つか出ていて、非常に大きな課題に取り組みおいていくことになるなということが分かってきました。そのときに私は、先ほど伊藤委員さんからご紹介いただいた月刊誌『信濃教育』で、400円なのですが、昨年かけがえのない命について特集した号があったのを思い出しました。

それは、県内の先生はよくご存じの、西駒ヶ岳の聖職の碑のことで、赤羽校長が殉職をされたこと。あるいは、私の恩師に当たる波田中の丸山實先生のことですが、谷浜海岸で一人の子どもさんが亡くなられて、二人の教職員が亡くなったこと。先生は50代で、もう一人の女性の先生は20代で先生になったばかり。また、私が以前勤めていた上田二中では、これは80年ぐらい前だったと思うのですが、遠足の日解散の後、子どもが千曲川を近道して渡ろうとして仮の橋から落ちて、そこを若い先生が助けようとして、子どもは助かったのですが先生は殉職したといったこと。この特集にはあと佐久のスケート場の事故のこと。それは子どもを助けようとして先生が亡くなっている。こういう事例なのです。

私も学生時代に仲間と寮のこたつに入りながら、もし子どもが氷の張っている池に落ちてしまったら、自分は身を投げ出して飛び込めるかというようなことを話し合ったことがありました。私は、そのときはちょっと腹が決まっていなくて、本当にそこで飛び込めるかなと思ったのですが、何年か教職を重ねていくうちに、やはり子どもの魅力、かわいさを思うと、もう迷いはなくなってきたわけです。

そういったことと、今、いろいろ問題になっていることとは全く正反対の方向になっていて、本当に自分の命を投げ出して子どもを守ろうとしてきた先輩たちのこういうことを、やはりしっかり学び直す必要があるのではないかと。そういった人たちがどんな思いで子どもとかかわってきて、教育を考えてきたかという研修をする必要があるのではないかと思うわけです。これは資料があれば学校単位で幾らでもできることなので、いろいろ官制の研修でよいものもたくさんありますが、自主的に計画を立てて、このような資料から、あるいは体験談から求めていくということが必要ではないかと、そんなふうに思いました。以上です。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。
今とても大事なことだなというふうにお聞きいたしました。
その他にはいかがですか。

(伊藤座長代理)

先ほどのこの『信濃教育』の中で、「今、苦況を糧として成長する教師」ということで、カウンセラー学会でも著名な國分先生が二つのことを書かれていらっしゃる。

一つはプロフェッショナル・アイデンティティーという、職業上の自覚のこと。教師としての役割意識というものをいかにもつかということです。その事例で國分先生が紹介されたのは、ある医師がお酒の席で決してお酒に手を付けない。なぜかと聞いたときに、自分は医師であるから、この席でどなたかが何らかの身体上の問題が生じたときにすぐに手当てをできるようにという思いがあるから、自分はお酒に手を付けないと。そういう職業上の自覚をもってその席に臨んでいるということが事例として出ていました。プロフェッショナル・アイデンティティーとして、職業上の教師としての役割、自分の権限、してもよいこと、自分の責任、しなくてはならないこと等、そういったものをきちんと自覚することが重要であると紹介されています。

二つ目に、リレーションづくりの能力ということを紹介されていて、それはふれあいやづくりの能力ということを行っています。つまり人の気持ちが分かること。それから今もお話にありましたが、人のために自分の労力や時間を使うこと。いわば人のための伴走者になるような。そして、ほめるという人の気付かない評価ができ、人がそこにいるということにきちんと気付くことができること。そういうことが、人のために自分の労力や時間を使うということで紹介されています。また、自分を打ち出すこと。自己一致していると言いますか、正直に自分自身のことを語る。そういう教師でありたいということが書かれています。

こういったことも教員に求められる資質能力の一つの候補になる話かもしれません。ご紹介させていただきます。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。その他、いかがでしょうか。

(藤澤委員)

すみません、資質能力のことでもよろしいでしょうか。

(松岡座長)

はい、どうぞ。そちらの方にも今、伸ばして議論しておりますので。

(藤澤委員)

先生方が社会に接する機会や産業界と接する機会を考えると、例えばキャリア教育等で、先生がいろいろかかわっていくことがあると思います。

その中で、社会ではこういうコミュニケーションがあるとか、マナーがあるとか、

そういうことも基本の研修として取り入れていくということも大事ではないかなと思います。今まで、研修の中にそういう機会は少ないということをお伺いしたこともありましたので、学校ごとにもいろいろできると思っていますので、キャリア教育の一環としても、社会との対応の中では必要などころではないかなと思います。

例えば、小・中学校の先生、中学校の先生は分からないのですが、名刺を持たない先生もいらっしゃるというお話も伺っていますので、名刺のやりとり等基本のマナーも大切に思います。そういうちょっとした人と対応するときのマナー研修というものも管理職とか、ある程度 30 年ぐらいたった先生たちには必要になってくるのではないかなと思います。

新入社員研修の一つとしてコミュニケーション能力向上というのを入れています、「これは新人研修でやることではないか」とおっしゃった部長がいらっしゃいました。でも研修を 2 日間受けてみると、いろいろな新鮮な気付きがあって、人に対してのコーチング研修にもつながっていくので、「こんなことは今さら聞けない」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、このような基本の研修を入れていくことの必要性もあると思います。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

学校現場だけではなく、外に通用するよなというお話だったと思います。

先ほどのご説明で、初任と 5 年、10 年で研修をやっているということですが、やっているプログラムというのは固定のものなののでしょうか。どんなことをこの初任と 5 年、10 年でやっているのか、私は教員をやっていないので、あまり具体的なイメージをもっていません。また、委員の皆様も知らない方が多いと思うので、一覧とかがあればお配りいただければと思います。研修全体を考えると、どんな研修をやっているのか分からないと、ちょっと話がちぐはぐになってしまうので、簡単にご説明していただければありがたいのですが。

(武田教学指導課長)

初任者研修につきましては、先ほど申しましたように、1 年目が主であります。

1 年目については、先ほどのお話にもありましたが、初任者に指導教員というのが付きます。指導教員は基本的には校内あるいは 2 校を兼務する場合がありますが、先輩の先生になります。指導教員を中心に校内で 300 時間の校内研修を行います。これは初任者が授業をやって、それを指導教員が授業参観して、その授業について指導をする。逆に指導教員や先輩の教員が初任者に授業を見せて指導する。その他に、いろいろな校務ですね、生徒指導やその他の講話等を含めて 300 時間行います。これは 1 年目に、週 10 時間程度で実施しております。

その他に校外研修がございまして、1 年目につきましては 17 日間校外研修を行います。これは総合教育センター等へ出向いての研修及び様々な研究集会ですね。あるいは授業研究会。自分の学校以外で行われる授業研究会に出て行って研修をするというものでございます。また、今、藤澤委員からお話がありましたことにもかかわるのですが、この初任研の 3 年目の校外研修において、いわゆる異業種、教員以外の職業

を2日体験するというところで行っているところでもあります。

5年経験者研修については、2日間の総合教育センター及び教育事務所での研修。

10年経験者研修についても、校内で自己課題をもって1年間研修をすることと、10日間の校外研修が行われます。ここにおいても2日から3日の異業種体験、教員以外の職業体験を実施しているところがございます。大まかなプログラムはそんなところがございます。

(松岡座長)

校外研修というのは、そういう他業種を見たり、センターでの研修会に出たり、そういうものですね。

校内は課題をもって何か1年間やればよいというものですか。

(武田教学指導課長)

基本的には校長等と随時面接をしながら進めます。

1年間終わると、当然、まとめでも校長等と話をしながら自分の研修の成果や課題について見直します。1年間の研修の内容及び成果、課題についてはレポートにして県教育委員会へ提出をしていただいております。今のは10年研についてです。

(松岡座長)

レポートとかは公にされているのですか。

(武田教学指導課長)

レポートは公にはしておりません。

(松岡座長)

チェックするのは校長先生だけ。

(武田教学指導課長)

校長及び教育委員会。

(松岡座長)

教育委員会でね。ちょっともったいないですね。せっかく1年かけてやった研修を内部だけで見ているだけでは。もっといろいろな発信してもらえれば、それが役に立つのではないかと思います。大体分かりました。

このような研修を常にやっていらっしゃるということですが、その組み換えとかやり方を変えるとか、いろいろな案があるかと思えます。この辺について何かご意見はございますか。どうぞ。

(米持委員)

松本ろう学校の米持でございます。

本校も昨年10年研の先生がいらっしゃいました。

一緒に計画を立てながら1年間進めてまいりましたが、この先生が本当に教員人生の中ではっとさせられたというのが、先ほど武田課長さんがおっしゃってくださった2日から3日の異業種体験です。この研修をしてきた後の本人の顔付きが本当に変わりました。プロというものはこういうものなのだということを本当に強く学んだようです。「今まで頑張ってきたつもりであったけれども、本当に子どもの前に立ったときにプロであったかどうかということを自分自身に問いました」と最後のまとめのところでお話をされていました。本当に学校の中だけでは成し得ないことを、外の力をお借りして成し得ることができました。研修のあり方として、一人前の教師に成長していくプロセスがとても大事なのだなということを学ばせていただいたところです。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

先生、それで10年研の方がいらして、何か気付いたこと、こうした方がもっとよいのではないかと思うこと等、何かございますか。

(米持委員)

今年、10年研の評価がどのように生かされているかなということを見ています。授業を見させていただいていますが、子どもさんとのかかわり方が全然違ってきます。

(松岡座長)

そういうものなのですね。

(米持委員)

はい。常に私も4月、5月の面接のときに確認をしています。「先生、去年の反省を生かして今年はこのことをやりたいと言ったよね」と。具体的にどうかという語りかけをやっていきますので、そういう視点で私が見ているなということも本人は分かっています。実に子どもさんを大事にしながら、子どもさんを真ん中に置いた教育と言葉では言いますが、それって本当にどういうことなのだという実践を今正にしてくれているところでもあります。ありがたい10年目の研修だったなと思っています。

(松岡座長)

では、特にもっとこれがあったらよいというようなことはありませんでしたか。

(米持委員)

それもたくさんあるかもしれないのですが、まだまだプロセスであるということで、そんなに満遍なく解決できないだろうと。私も目標が到達できるように、私も生徒も応援していければと思います。

(松岡座長)

ちょっと続けて質問ばかりして申し訳ありません。今、長野県は10年で研修が終わりということなのですが、この点については何かお考えはございますか。

(米持委員)

ここを出していただいておりますキャリアアップ研修ですが、これはやはりあった方がよいかなと思います。途中、ちょっと道に迷ってしまったり、忘れかけてしまったりしていることを、ここでもう一度リセットして、原点に戻ってみるという場が、やはり 20 年ぐらいのところであってもよいと思っています。実にその時期が 40 だという話をしてくださる方が多いですね。

(松岡座長)

40 ちょっとですか。

(米持委員)

はい。根拠はちょっとよく分からないのですが、40 前は、とても頭が柔軟でいろいろと入っていきやすい。しかし 40 を過ぎると、人が固まって、新しいものを入れようとする能力が衰えていくと言いますね。

(松岡座長)

それは困ります。特に先生は。

(米持委員)

40 前後がよいのではないかという話はあちらこちらで聞かれるところではあります。是非キャリアアップ研修というものを大事にしていきたいなと思っています。

(松岡座長)

そうですね、ありがとうございます。

それに関連していかがでしょうか。では、北澤委員、どうぞ。

(北澤委員)

質問になるのですが、法定研修の研修内容というのは、どの程度自由度があって、県内で決められるものなのかという部分をお聞かせください。

(松岡座長)

では、回答をお願いします。

(武田教学指導課長)

例えば初任研についてとか、そういうことですか。

(北澤委員)

初任研、5 年研、10 年研の研修プログラムがありますよね。それはどの程度国でこのように使いなさいと確定していて、県の自由な裁量はどのぐらいあるかということです。

(武田教学指導課長)

分かりました。初任研については先ほど申しましたように、指導教員が付きまして、その指導教員はお国の方からもお金が出ているので、指導教員の付く校内研修の 300 時間、これはもう各校、きちんとやります。

校外研修については、概ね 25 日みたいな例示はされているのですが、これはその県の実情に合わせて。ですから、本県みたいに 3 年間でやっている県も幾つかあります。2 年間でやっているところもあります。その内容等についてもそれぞれの都道府県あるいは市町村教育委員会の独自性というのは発揮できるものだと思っています。

今回、ご議論いただくキャリアアップ研修については、本県がもし決めると県独自の研修になりますので、中身についてもここでご議論いただければと考えております。

(松岡座長)

よろしいですか。研修の時間数とか内容とか、どのぐらい拘束されて、どこまでが義務で、自由裁量の部分がどの辺なのかというのがちょっと見えにくいというお話だと思います。

(武田教学指導課長)

では、ちょっとその辺もまとめて内容と合わせてご周知したいと思います。校内研修、先ほども言った初任者研修の校内研修の 300 時間につきましても、この中身のおおよそのシラバスというか計画については、文部科学省から例示をいただいています。それを基に県教育委員会と市町村教育委員会及び学校現場と話し合い等を重ねながら内容を決めているところでございます。

(松岡座長)

また細かいことは後日資料でいただけるとありがたいと思います。

では、今後の研修のあり方に向けて、どうぞ。

(櫻井委員)

キャリアアップ研修に限っていいですか。

(松岡座長)

結構です。

(櫻井委員)

今日の議論ではないのかなと思って、まだ頭の中で整理がついていません。キャリアアップ研修という制度を否定するわけではないのですが、高校現場では、例えば教務主任であるとか、生徒指導主事であるとか、そういうものは 3 年交替で、3 年やったら一応ノルマが終わるので、次の人にバトンタッチするというように校務分掌を決めている例もあります。そういう学校現場での実態があります。

(松岡座長)

それは高校がそうだといいことですね。

(櫻井委員)

そのときに、ライフステージに応じたというような言い方をすると、自分の職と研修の内容が必ずしも一致しないと思われる可能性があります。自分を振り返って年齢と相応の研修をしましょうという意味は分かるのですが、モチベーションと言いますか、何のためにやるのか、そこら辺の説得力というか、やらされ感ではない、うまく研修に向かっていく方法を考えなければいけないと思います。研修がいけないという意味ではなくて、そういう工夫が必要ではないかと思います。先ほど言った人間力を広めるといふ広いスタンスの研修というのはあり得ると思うのですが、やはりそうするとモチベーションがどうかという問題があるし、そこら辺を議論していかなければいけないと思います。

(松岡座長)

はい。今日はそこまで踏み込まない予定ですが、ちょっと話も出てまいりましたので、若干ご意見をいただき、また次回その点についてはじっくりやりたいと思います。後、お一人ぐらいいはお話していただく時間があります。言い足りなかった方。よろしいですか。では、どうぞ。

(櫻井委員)

さっき言葉が足りなかった「一人一研究」ですが、要するに専門職、専門性ということを高める、みんなで高めるということが職業への誇りにもなるし、自分の誇りにもなっていくと思います。今、教員は、その誇りを失いつつある。自信を失いつつある。これは鶏と卵の関係で、今の非違行為のことや我々の議論のこと。これは本当に鶏と卵で、それを変えていかなければいけないと思います。やはり原点に戻る場合は専門性を高めるということが我々の使命だろうと考えます。そういう意味で、授業だけではなくて、今、求められているのは社会とのかかわりであったり、人間性であったり、コミュニケーション能力であったりということがあり、授業の専門性だけではなくて、その辺りの専門性を高める研修が必要ではないかと思っています。

(松岡座長)

どうもありがとうございます。

確かにそのように思います。私、中学にいて、教科の能力には本当に差がないと思う先生が多いのですが、クラス担任に付けると、その違いというものがものすごく出てしまったケースがあるわけです。他の面ではほぼ一緒だろうなと思って、一生懸命やっているし、情熱もあるし、能力も高いからというので、あるクラスに付ける。でも、そこに入ると、どうも子どもとうまくいかない。それでしようがないので次の年に担任を替える。新しい先生が入った途端、もう1ヶ月ぐらいいでクラスがまとまってしまうりするのです。それを見て、教師の力量というのは非常に大事だなと思いました。クラスがまとまると本当に子どもたちが何でも協力し合えるし、先生をすごく

慕って、よい雰囲気になるのですが、そうではなくて、どうも子どもとの間に溝ができてしまうと、本人はそのつもりではないのですが、それがうまくできないと非常に子どもも不幸だし、先生も大変だなと思います。そういう力をどうやって付けたらよいかということ、校長をやっていたときに非常に悩みました。そんなことも是非次回などでお考えいただいて、ご意見をいただければありがたいと思います。

本日、予定した時間になりました。こういう会議では珍しいのですが、事務局の方で、さすが先生という感じで、大事なこととして出てきたことを、このホワイトボードにまとめていただいています。これら、今日いただいたご意見をまとめまして、次回の資料を作っていきたいと思います。

先ほどお話が出ましたように、今回は研修のあり方ですね。キャリアアップ研修というものが提言されていますが、それについては余り反対もなさそうなのですが、どんなものにしたらよいかということで非常に大事なこととなります。ライフステージに応じたというものは、ちょっとそれもどうかという話が出てまいりましたので、研修のあり方に関しては次回、話を詰めていただくということにしたいと思います。

本日は非常に活発にご意見を頂戴いたしまして、どうもありがとうございました。以上で議事を終了させていただきます。

(飯島教学指導課高校教育指導係主任指導主事)

座長さん、お疲れさまでした。

長時間にわたる議論、本当にありがとうございました。

本日、議論していただいた内容につきましては、今、座長さんからご説明いただきましたが、事務局で整理をさせていただきたいと思います。その上で次回の会議、さらに議論を深めていただくということで、キャリアアップ研修あるいはライフステージに応じた研修のあり方等についてお願いしたいと思います。

また、会議の期日につきましては、本日ご提出いただきました日程調整の表を基にしまして、日を定めまして後日ご案内を申し上げます。よろしく願いいたします。

では、以上で作成会議を終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

(松岡座長)

どうもありがとうございました。